

[成果情報名] イチゴの花芽分化前定植における培養液の供給開始時期

[要約] 「香川型イチゴ高設・バッグ式養液栽培」において、花芽分化前の苗を定植すると開花が遅れるが、未定植苗の花芽分化が確認されるころまで培養液の供給開始を遅らせると、開花の遅れを緩和することができる。

[キーワード] イチゴ、高設栽培、花芽分化

[担当] 香川農試・野菜担当

[連絡先] 電話 087-889-1121

[区分] 近畿中国四国農業・野菜

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

「香川型イチゴ高設・バッグ式養液栽培」において、花芽が分化していない苗を定植すると、開花が遅れ、価格の高い年内の収量が減少する。しかし、定植期間が長期にわたることや、解剖顕微鏡による花芽分化確認の煩雑さから、分化が未確認の苗や明らかに分化前の苗を定植せざるを得ない場面や、逆に定植が遅れる場面が想定される。そこで、分化確認作業の省略と定植作業の分散を図るため、苗を花芽分化前に定植したのち、培養液の供給（以下給液）開始時期を遅らせることにより、開花を前進化する技術を検討する。

[成果の内容・特徴]

- セルトレイで育苗した花芽分化前の苗を本方式のバッグに定植し、直後から給液を開始すると、頂花房の開花が遅れる。しかし、未定植苗の花芽分化期ころまで水のみを与え、給液開始を遅らせると、開花の遅れを緩和することができる（表1、図1）。
- 年内の収量も開花と同様に改善されるが、挿し芽時期が遅く、育苗日数が短い苗の場合は、慣行との差が大きく、効果が低い（図2）。
- 給液開始時期は未定植苗の花芽分化期（慣行の定植期）が適当で、遅らせるとかえって開花は遅れる（図3）。
- 花芽分化前の9月10日に定植し、9月23日まで培養液の供給を遅らせた株の花芽分化は、9月23日ごろには花芽分化期から花房形成期に達し、未定植苗の花芽分化とほぼ同じ程度である（2006年度調査、図表省略）。

[成果の活用面・留意点]

- データは「香川型イチゴ高設・バッグ式養液栽培」（培地はピートモス3：ロックウール粒状綿1の混合、株当たり2.25l）に、セルトレイ（外寸法358mm×500mm、35穴、容量約130ml）に挿し芽した苗を定植したものである。
- データは全て「女峰」の試験結果であるが、「さちのか」でも同様の結果を得ている。
- 挿し芽時期が遅い苗は効果が低いので、7月下旬には挿し芽を行い、慣行の育苗と同様の肥培管理を行う。
- 培地を連用する場合、前作の残肥による影響が出る恐れがあり、注意が必要である。
- 定植期が高温であるため、昇温防止対策を講じることが望ましい。

[具体的データ]

表1 花芽未分化苗定植の作業スケジュール

	挿し芽	育苗管理	花芽分化確認	定植	培養液供給（給液）
慣行	7月下旬	→	9月20日ごろ	確認直後	定植直後
未分化苗定植	7月下旬	→	→	9月10日ごろ	9月23日ごろ

未分化苗定植は定植後培養液供給開始まで水のみを与える。

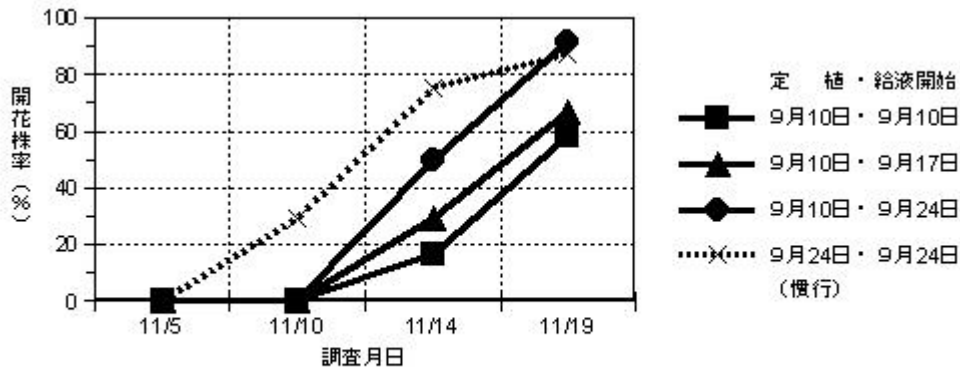


図1 培養液供給（給液）開始時期が開花株率に及ぼす影響（2003年度）

品種：「女峰」 挿し芽：7月24日 定植から給液開始までは水のみを与えた

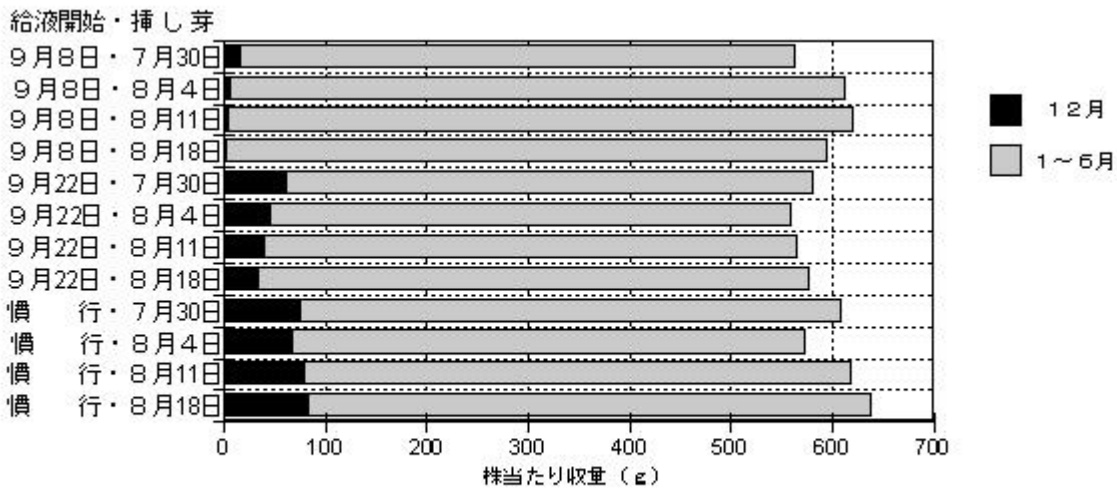


図2 挿し芽時期および給液開始時期の違いが収量に及ぼす影響（2004年度）

品種：「女峰」 定植：9月8日 慣行は定植、給液開始とも9月22日 定植から給液開始までは水のみを与えた

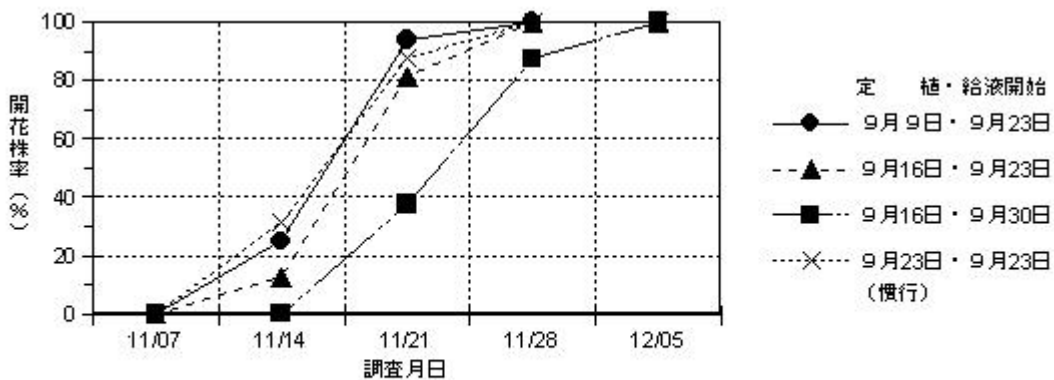


図3 定植や給液開始時期の違いが開花株率に及ぼす影響（2005年度）

品種：「女峰」 挿し芽：8月2日 定植から給液開始までは水のみを与えた

[その他]

研究課題名：「イチゴらくちん」の高収益栽培システムの開発

予算区分：県単

研究期間：2001～2005年

研究担当者：近藤弘志、牛田均、松崎朝浩